

## 第2章 食糧危機

### 植民地って何？

「第二次世界大戦後、アジアを中心に大国からの独立を目指して第三世界が立ち上がるんだ。」

「なぜ第三世界は独立をめざしたの？ なにか不具合があったの？」

「そうだね、そこから話を始めよう。これは世界情勢を語る上で大事なところなんだ。つまり、第三世界、もっと言えば、貧しい国々は欧米の先進国の植民地だったんだ。」

「植民地って何？ 悪いことなの？」

「植民地とは、当時のアメリカやイギリス、フランスといった先進国、帝国主義国とも言うんだけど、その国たちが発展途上国を経済的に支配することなんだ。植民地の成り立ちと支配の方法を考えてみよう。そうすれば、なぜ途上国は貧しいのか？ なぜ欧米の先進国では飢饉はもう起きないのに途上国では慢性化しているのか分かるはずだ。」

「まずもし自分が貧しい国を支配しようとしたらどうするかい？」

「うーん、強い軍隊を使って強制的に支配するかな。こら、みんな言うことを聞けって。」

「それも方法のひとつだね。初期の植民地支配では君が言う様に軍隊を使う方法だった。でもその方法は効果的ではなかったんだ。」

「どうして効果的ではないの？」

「世論さ。もし、私が貧しい国、つまり植民地だったら、自分の国や帝国主義国の世論に訴える。そして帝国主義とたたかったり、勝手に自分の食糧を作ったりするな。定刻主知の国の軍隊でも途上国の国土全部の監視をしたり、国民を牢に入れたり、強制労働をさせたりはできないからね。そんなことをしたら世界の世論が黙っちゃいない。昔、アフリカ人たちは奴隷として働かせるためにアメリカやヨーロッパに強制的に売買されて連行されたが、そのやり方は今では行われていないんだ。」

「じゃあ、どういう方法で植民地支配というものは行われたの。？」

「帝国主義国つまり支配する側はもっと巧みな罠を仕掛けたんだ。もっと確実に効果的な手をね。」

「確実に効果的な方法？」

「ジョージ・オーウェルという人は著書『1984』の中で本当の支配というのは考えを統制することだと言っている。自分の使っている言葉や考えや価値観が、実は支配する側の押し付けられたものだということが気付かなくなるということなんだ。その中心的な役割を持つものがマスコミともいえるんだ。お父さんが植民地主義の悪い人になってやり取りを試みよう。ここでも必ず階級という視点を忘れちゃだめだ。植民地の支配階級と国民とはまったく立場が違う。君は途上国、つまり植民地の飢えている村の農民としよう。お父

さんは先進国の支配層の人、植民地主義を広めようとしている悪い人の役だ。これから皮肉と自らの責任をこめて『先進国の威張った人たち』と呼ぼう。先進国の発展は途上国を踏み台にしたものだからね。じゃあ、はじめよう。」

「はい、『先進国の威張った人たち』は私の国、途上国にやってきました。それから彼等はまずどうするの？」

「そうだな、まず彼等は武力で脅しをする。近代兵器を見せつける。ある村を焼き払う。」娘は誇らしげに言った。

「私と一緒に答えだね。」

「うん、これはあくまで必要ならばという措置の第一歩なんだ。第二次世界大戦後にはこの直接武力でねじ込める方法は使われなくなった。先進国の威張った人たち目的はほかにあるからだ。その目的は、途上国の支配層、権力を握っている人間たちを抱きこむことから始まるんだ。途上国の支配階級は先進国にとっても従順な態度をとるように彼らは仕向けてきたんだ。」

「どうやって？」

「なに簡単なことさ。途上国の支配階級を彼等の先進国に招待して『豊かさ』を見せ付けたのさ。そして途上国の支配階級の人々の豊かさを保障したんだ。その中でどうやって国を開発するべきかを教え込んだのさ。経済モデルつまり経済を良くするには今の先進国のやり方を身に着けると先進国の威張った人たちは吹聴したんだ。」

「そうか、私の国の政治家や大企業を利用したんだね。」

「そう、まず支配したい国に何でも言うことを聞く政府や特別な権力を持つ人々を作ったんだ。つまり直接支配するのではなくて、間接的に支配をすることにしたんだ。体制に不満を持つ人々をいつも支配する側は恐れていたんだ。税金を取ることで彼らは富を得たんだ。その後、国際機関を通して、道路や空港や鉄道の整備をしたんだ。」

「どうして交通を整備したの？」

「植民地の人々に作らせた農産物や工業生産物を輸送して、先進国へ運ぶためさ。」

「先進国へ輸出して・・・そうか、お金の換えるんだ。」

「そのとおり。そして、人が耕し、種をまき、神が育てるといった伝統農業ではなくて、アメリカ式の近代的農業を教えて生産力をアップさせた。」

「この話を聞く限りはあまり悪いことはしていないような気がするね。」

「そこがミソなんだ。これから説明しよう。」

「植民地支配を考えるとということは、貧困問題、もっと突き詰めると食糧問題を考えることなんだ。公然と認められている事実がある。それは、食糧は武器であり、国際政治の交渉で使われる有力な道具だということだ。『言うことを聞かなければ食糧をやらないぞ』と脅すことができるということなんだ。食糧は植民地の政治や経済を支配する道具として使われてきたんだ。」

「じゃあ、植民地は自分たちの食糧は自分たちの分は自分たちで作れば脅されないし、飢えもなくなるのに。」

「そうだね、貧しい国々は農業を唯一の生計の手段にする場合がほとんどだ。飢えている人々が多い国では、ほとんどの農民は土地を持っていないんだ。」

「ほとんどの農民が土地をもっていない？ どういうこと？」

「貧しい国では、土地は富を意味する。土地があつて初めて生計の唯一の手段としての農業ができる。しかも土地のない農民を小作として使うか、土地をかして地代でもうけることができる。その土地が限られたごくごくわずかな少数のもの手に握られ、貧しい農民は土地を借りるか、小作農として農業に従事しているということなんだ。なぜ途上国の農民がまずしいのか？ その途上国側の本質のひとつはここにある。社会が不公平だからだ。これをまず踏まえておこう。」

「途上国の貧しい農民は、必死で働いても法外な税金や地代でお金はなくなってしまうんだね。」

「少し古い統計になるが、本質は変わらないので話しておくよ、南米では、土地所有者のうちの17%が土地全体の90%を所有している。アフリカ全人口の4分の3の人々の農地は全体の4%にすぎないんだ。しかも大きな土地を所有している人はヘクタールあたりの収穫量、つまり収穫率が低くても気にしない。あまりお金や労働をかけず耕地の大きさだけを問題にしている。しかし小規模な自作農家は丹念に手を書けるため収穫率が高いんだ。」

「途上国では、もっとたくさん農産物が作れるのに、社会構造がつくらせないんだね。」

「貧しい人々は、怠けているわけではないんだ。不公平な土地所有の実態が主な要因なんだ。これだけは覚えておこう、不公平な社会を公平にしようとしたら、まずは土地改革を行うしかないということだ。ここから全てが始まるんだ。」

「土地改革？ って何？」

「土地改革とは、ごくわずかな人が持っている広大な土地を政府が安く買い上げ、他の大多数の国民に分け与えることだ。日本が他の先進国に比べていくらか公平な社会なのは、戦後土地改革が行われているからなんだよ。」

「途上国の経済を考えると、土地・農地というものを公平にしておかないと、農産物売って生じる利益も公平に分配されないわけか。」

「こんな話がある。日本のボランティアがやってきて井戸を作り途上国のために良いことをしたとして帰っていった。しかし、その井戸は地主の土地にあるため、地主はその井戸の水を独占し、水を売ってますます豊かになったそう。貧しい農民はついにその井戸を使うことはなかった。これは途上国の土地問題を学んでおかないと善意が無駄になってしまう例だね。」

「先進国の威張った人たちは土地改革をすすめたの？」

「途上国の支配層、権力層を買収してある都合上、彼らが得をする不公平な社会構造には一切口を出さないんだ。彼らは公平な社会というのは好きではないんだ。」

「先進国の威張った人たちにも責任があるということは、そこに住む私たちにも責任があるんだね。」

「そうだね。今までは途上国の実情とそれを利用した先進国の問題だったけれど、今度は対外的な関係をみてみよう。途上国の支配層や権力を持つ人はすでに先進国の言うとおりのことをするようになっていることはすでに述べたよね。先進国の威張った人たちは途上国の支配層を通じて三つのことを強要したんだ。豊かになりたかったら三つのことをしろ、とね。」

「三つのこと？」

「①換金作物を作ること。②アメリカ式農業を行うこと。③貧しい国民どもがたてつかないように嘘をマスコミで流すこと。この三つだ。」

「換金作物？アメリカ式農業？嘘？」

私は植民地や国家間の経済関係を考える上で、非常に計算された枠組みを説明することが非常に重要に思えた。華やかな革命の話に行きたがる心を抑えて、少し退屈な経済の話をすることにした。

### 換金作物栽培で飢える人々

「お父さん、換金作物ってなに？」

「綿花、コーヒー、茶、バナナ、砂糖、小麦などさまざまだ。生産者はこれらを生産して先進国に売りお金をもらう。つまり生産者と利用者が違う作物のことをいうんだ。しかも先進国の野郎が望みのままに作らせる作物なんだ。」

「そうか、換金作物は先進国による先進国の作物なんだね。」

そう、換金作物が穀物であっても、農民が飢えているのに関わらず、換金作物は売って税金や地代に充てて農民は暮らしてきたんだ。だから、飢えや栄養失調が途上国に蔓延してきたんだ。」

「本当は、自国に必要なものを自分たちの手で作り、消費すれば良いのにね。」

「そうだね。換金作物を作り一度外国に売って、そのお金で自国に必要なものを買うという構造を先進国に押し付けられたんだね。」

「では、君の仮定の話が続けよう。途上国の大多数の農民のように、君たち農民は、今この家の裏の 100 m<sup>2</sup>のわずかな土地をもっているか、もしくは、借りているとしよう。君は換金作物を作らなければならない。どうする？」

「まず、換金作物でも、一生懸命働いていっぱい稼ぐことを考える。そして、土地を買い、トラクターなどの農業機械を購入して農場を大きくする。」

「実にいい答えだ。でもそれは社会が公平な場合だけ成り立つ。地代が生産量に比例した地代でも、あるいは固定の地代でも、地代が高いため農民の手元にはほとんど残らない。ましてや、銀行などはお金を貸してくれない。天候により収穫が落ちると、大地主たちから法外な金額で生活費を借金するのがやっつである。小さな貧しい農家、つまり大多数の

農家は天候により不作になると、農地を大地主に売って生き延びてきたんだ。」

「永遠にうかばれないよ、農民は。」

「国家間での関係はもっと巧妙にできているんだ。まず先進国に換金作物を売っているがその換金作物は先進国の工場で加工され先進国の消費者の口に入る。たとえば、カカオ豆からいろいろなチョコレートが、砂糖からお菓子が、コーヒー豆からインスタントコーヒーが、といった具合だ。輸送や加工や販売といった部分で国家的な農業専門の企業が利益をほとんどもっていく。残りのわずかな部分が生産者の取り分なんだ。食料品の数パーセントにしかならない。しかしその取り分も格差があるから問題をさらに深刻にしている。スーザンジョージ著『世界の半分はなぜ飢えるのか』（朝日選書）によれば、たとえばブラジルなどでは裕福な10%ほどの人々が国民全体の収入の50%以上を占める。もっとも貧しい20%の人々は数パーセントしか取り分がない。インドでも他の途上国でも数字の違いこそあれ、構造的な問題は一緒なんだ。」

「加工や流通の分野で力を途上国がもっていないので、食糧価格の引き上げもできないわけか。なんとか高く売る方法探さないとだめだね。そうだ、高く売りつけばどうかな？」

「そんな発想も途上国と先進国の間では通用しない。代用品が開発・販売されているからだ。」

「代用品ってなに？」

「たとえば砂糖の変わりにサトウキビからシロップを作ったり、ヤシやココナッツの代わりに大豆から油をとり石鹸やマーガリンを作ることができるんだ。つまり、それだけ途上国は先進国に売りづらくなるわけだ。」

「途上国は換金作物の価格を自由にすることはまったくできないわけだ。あきらめるしかないんだね。」

「実は、途上国は換金作物の輸出増と増産を実現してきたんだ。問題は貿易量が増えたにも関わらず、実勢価格に基づく貿易額の増加がごくごくわずかしか増えていないことなんだ。」

「価格がどんどん安くなってしまっただね。」

「そう、その分逆に先進国ではインフレーションといって工業製品価格が上昇しつづける。たとえば、コーヒー豆100袋で1台のトラクターが買ったのに、コーヒー豆300袋でないとトラクターが買えなくなるということなんだ。」

「どうすればいいのかわからなくなってきた。何とか収量を上げるように頑張るしかないんだけど・・・」

「途上国の農民は、そういった収量を上げるために、あるいは食糧問題を解決するためにどうしたと思う？」

## アメリカ式農業システム

「そこでお父さんの言う②番のアメリカ式農業を途上国の農民にやらせたわけだね。そも

そもアメリカ式農業って何なの？」

「途上国や先進国も一斉にアメリカ式農業システムがもっとも収穫量があがり効率的とされているんだ。以前に言った言葉を思い出して欲しい。」

「人が耕し、種をまき、神様が育てる農業はすでにないってこと？」

「そうなんだ。アメリカ式農業というものを考えるために、三つの段階に分けて考えてみよう。」

「3つに段階に？」

「一つ目は『投入物』だ。二つ目は『生産』、そして最後は『収穫後の作業』と分けてみよう。」

「生産以外はよく分からないや。」

「『投入物』とは種子、農機具、水、肥料、農薬が含まれる。『収穫後の作業』とは、貯蔵や加工やそしてスーパーマーケットなどでの販売、これが全工程になる。」

「何処に問題があるって言うの？」

「アメリカ式農業の中心となるのは投入物と収穫後の作業になる。投入物の何処に問題があるのか考えてみよう。アメリカの農業というと何を連想する？」

「アメリカの農業というと広大な土地で大きなコンバインや飛行機で農薬をまくイメージかな。」

「そのイメージでいいんだ。種子はハイブリッドと言って、バイオテクノロジーの技術を駆使して作られる種子をいう。すごいのは、この種子が成長してそこから種子を採ろうとしても2代目の種子はハイブリッド種子の性質を引き継がないことだ。ということはどうなる？」

「農家は高価な種子を毎年買わなくてはいけなくなる。」

「そのとおり。このハイブリッド種子は収穫量を大きく伸ばすとされている。しかしこの種子には必要なものがある。それは大量の化学肥料、そして農薬だ。分かりやすく言えば、ハイブリッド種子とは高反応種子であり、大量の化学肥料に反応する種子なんだ。そのために雑草を駆除するために除草剤を使い、生態系を壊すから大量の農薬を使って収量作物を一時的に保護して生育させているに過ぎないんだ。」

「土地がかわいそうな感じ。」

「しかもこの種子は独占ビジネスとなっているんだ。アメリカのモンサント社、デュポン社、スイスのシンジェンタ社、ドイツのバイエル社が世界の農業の種子を握っていることも大きな問題なんだ。さらに農薬や農機具も同じように寡占状態にあるんだ。彼らが言い値の高い種子を途上国に売りつけているわけだ。在来種がなくなってしまう危険性もあるしね。」

「もう種を採取する時代から購入する時代なんだね。」

「昔のイギリスで行われた3年に1回は休耕する三圃式農業のほうがよほど効率的にお父さんには思える。化学肥料により土地はどんどん疲弊し、作物に悪影響を与えていくこと

は農民は皆知っているんだけどね。塩害といって水の確保のための灌漑と化学肥料により塩を地表に噴出させる被害も世界で広がっているんだ」

「農機具はどうなの？便利でよい道具だよな。」

「機械という物は人がいなくて困ると時に効果を発揮するよね。世界最大の食糧生産国アメリカの農業人口は全人口のわずか数パーセントだというのうなずけるよね。機械の普及は、農業を大規模化して、大土地所有者には一時的にたくさんの収量をもたらしたろう。しかし、機械を買えない貧しい農民たちはどうしたのかな？機械を買えない貧しい農民たちはどうしたのかな？貧しい農民は土地を追われ貧富の差は拡大したんだ。」

「じゃあ、収穫後の作業にはなにか問題点はあるの？」

「収穫後の作業には、貯蔵・加工・分配があるといったよね。企業はできるだけ農産物をそのままではなくて加工して付加価値を高めて商品化するんだ。長い時間加工して、過剰なほどの宣伝を行い、高価なものにして売りつけるわけだ。貯蔵や流通に関してはひどい状況が世界にあるんだ。」

「ひどい状況って？」

「ひどい寡占状態、つまり少数の企業の独占状態にあるんだ。穀物に関しては貯蔵・流通を握っているのが 1970 年代にはたった 5 社だった。カーギル社、コンチネンタルグレイン社、ルイドレフェス社、ブンゲ社、アンドレガーナック社の 5 社がほとんどの世界の穀物を動かしていた。たったの 5 社が世界の穀物取引を事実上支配することとなっていたんだ。」

「世界の穀物流通量といたら大変な量だよな。」

「そうなんだ、牛肉や豚肉や鳥肉といった家畜の飼料穀物がたくさん使われているからね。穀物は、単に人間の食用だけではなく、家畜の飼料としても重要なんだ。1 k g の肉を生産するのに、牛肉はトウモロコシに換算して 1 1 k g、豚肉 1 k g につき 7 k g、鶏（ブロイラー）3 k g の穀物飼料が必要といわれている。でも現在はもっとすごいことになっているんだ。」

「もっと？どういうこと？」

「穀物商社は穀物メジャーといわれ、石油メジャーと比べられるようになった。穀物メジャーは再編を繰り返し 1999 年、コンチネンタルグレイン社がカーギルに買収されたんだ。結果どうなったかということ、カーギル社と ADM 社の 2 社の天下になった。ADM 社の幹部はカーギルからの天下りという実績を考えるとカーギルの天下なんだ。ここまでひどい寡占状態は世界の歴史上類を見ない。しかもカーギル社はロックフェラー系企業であり、コンチネンタルグレインはロスチャイルド系だった。世界がグローバル経済を謳う時代背景の中でロックフェラー系列のカーギルも大成長をしてきたんだね。しかもカーギル社は株式を公開していないんだ。同族会社といってカーギル家とマクミラン家による完全な極秘企業運営をしているんだ。2009 年の資料では、売り上げ 1166 億ドル（およそ 12 兆円）というんだから巨大さがよく分かる。経常利益は 33 億 3000 万ドル（およそ 3300 億円）にのぼる。注目しなくてはいけないのは、業界では 2 社の独占状態であるということは、世

界の食糧を握っているのはカーギル社ということになるわけだ。」

「アメリカ式農業は、わずかな企業が利潤を得るために進められた農業システムともいえるね。エネルギーの無駄使いや、環境の悪化、小作農民の失業など問題は多いということなんだね。」

「近代農業は途上国をまったく豊かにしていないということ？」

「悲しいけれどそうなる。世界のマーケットへ、どの農場から如何にリスクを減らして貿易をし、利益を上げるかという問題が農業関連ビジネス・アグリビジネスの最優先課題であり、その結果飢餓や食糧危機が起きようとそれは問題外なんだ。利益さえ上げれば良しの世界なんだ。途上国の広大な土地資源と低賃金労働力を特権階層とともに利用して農場や牧場を経営し、そこで生産された農畜産物のほとんどは、先進国に向けて輸出される。生産基盤としての道路・空港・港などは、先進国政府や世界銀行などから融資を受け、あるいは ODA（政府開発援助）の事業を通じて行われる。しかも生産方法はアメリカ式農業のマネであり、ハイブリッド種子、機械、化学肥料をつかった単一栽培なんだ。単一栽培だから不作のときは被害が甚大になるが換金作物を栽培することが国際市場でお金を得るただひとつのカードだと強要されるんだから貧しい農民たちには仕方ない選択なんだ。畜産物は配合飼料と薬剤を使ったフィードロット形式の工場のような飼育センターで行われる。」

「アグリビジネスによる先進国のための農業システムは、世界で食糧不足や栄養失調の人口を増やしながらか、結果的に豊かな国をますます飽食の国にしているんだね」

「世界の一般大衆は馬鹿じゃない。一般大衆は常に革命や社会運動で世界の政治経済を正しい道にひっぱて来た。気をつけなければならないのは、換金作物を作らせてたり、欠陥だらけのアメリカ式農業システムを押し付けたりするためには、世論誘導が巧みに支配する側輪利用してきた事実だ。先進国は世論誘導のための神話づくりをしたんだ。」

### 世論誘導のための神話作り

「神話作り？」

「そう、自然と常識とされた知識だ。でもそれは社会的な神話、常識というのは作られた常識であることがほとんどなんだ。」

「具体的にどんなもの？」

「うん、たとえば飢え。飢饉は天候や気候のせいとする論理だ。」

「そりゃ、天候のため不作になれば飢饉は発生するよね。アフリカのニュースで天候のため飢饉が起こったって言ってたよ。」

「じゃあ、質問だ。欧米では食糧危機はすでに存在していないのはどうして？」

「そういえば・・・」

私はこの常識とまず戦わなくてはならないことを嘔み締めていった。

「天候という自然現象が飢饉の原因ではないんだ。でもまったく関係がないわけではなく

単なるきっかけなんだ。歴史的に自然災害がなくても飢饉は起きる。日照時間が少なくても、寒くても生育するように品種改良は進んでいるし、砂漠でも大規模な灌漑設備をととのえ食糧を生産している事実もある。何があっても豊かな人間はいつでも豊富な食料を手にしてきた。飢饉は天災ではないんだ。」

「じゃあ、戦争のせいで飢饉は起きるといっても聞いたことがあるよ。」

「この本の冒頭で第二次世界大戦を考えたときに戦争こそ天災ではなく人災だということを事例にならって勉強したよね、戦争はビジネスで起きる。宗教戦争だろうと東西連戦だろうと戦争というものは、儲けようとする人々が時には世論を誘導し、時には政治の舞台裏の経済の中で権力まかせに戦争を仕掛けて儲けてきた。お父さんはまさにこのことを伝えたくて今君たちと話をしているんだ。」

「それじゃ、食糧危機は今までお父さんが話してきたように悪循環の経済システムから生じるということでのいいの？」

「根本ときっかけを間違えてはいけないんだ。根本は今まで話してきた悪循環の経済システムなんだけれど、そこの部分の奥には市場原理をフル活用してビジネスを行う巨大穀物商社の存在がある。天候により収穫が落ちることもあるだろう。でもそれはきっかけであり、それが理由で飢饉はおきない。一人当たりの農地面積とも関係もない。それは統計的に中国やベトナムなどで飢饉が起きないことで証明されるんだ。不平等な社会構造こそが元凶なんだ。その不平等な社会を利用して先進国の巨大企業がビジネスをすることに問題があるんだ。」

「おじいちゃんが昔、世界で食糧危機が起きて、豆腐、醤油、味噌など、あらゆる大豆製品の値段が2倍から3倍にはね上がるという騒ぎがあったって言っていたよ。全世界的な食糧危機があったのはどう説明できるの？」

「それは昔のことをよく覚えていたね。1972年穀物強盗事件のことだ。」

「穀物強盗事件？」

「1972年、ブレジネフ政権下のソ連において、アメリカから膨大な量の穀物が緊急輸入された。1971年から2年連続で干ばつが続き、穀物の生産量が落ちたからなんだ。ソ連は不作のため、世界最大の食糧輸出国であるアメリカから穀物の大量買占めを行ったんだ。」

「アメリカとソ連は核兵器や宇宙開発で競争し、犬猿の仲だった時代じゃなかった？」

「東西冷戦の本質がみえてくる事例のひとつだね。全ては資本の論理で動いているんだ。」

「儲かるビジネスかどうかってこと？」

「そのとおり。市場の論理、つまり需要と供給の関係で動く経済が不平等な経済下では巨大企業に非常に有利にビジネスが行われる事を覚えておこう。それは決して社会や人類の進歩には役立つことはないんだ。」

「穀物の生産量が落ちるとそんなに大変なことになるの？」

「シカゴ穀物取引所の穀物相場は驚異的なペースで上昇を続けたんだ。72年4月に1トン

が60ドル程度だった小麦価格は74年2月には4倍の230ドル程度に上昇したんだ。この影響は日本を直撃し、穀物の輸入価格が上がったんだ。結果、豆腐、パン、うどんが値上がりし、また、飼料用穀物が大豆やトウモロコシからできているため精肉までもが高騰したんだ。おかげで国民生活は大きなダメージを受けたんだ。途上国などは食糧危機などで飢饉が発生した。」

「アメリカにはそんなに穀物があつたの？」

「膨大な量の余剰穀物をアメリカは抱えていたが、このときにほとんど空になったとされている。アメリカでも大豆がの作柄が不調だったため、大豆を国内需要にまわして値上がりを防ぐために、大豆の海外輸出をアメリカ政府はストップしたんだ。これが大豆禁輸というんだ。自由経済。自由な貿易を訴えるアメリカが主力農産物を禁輸するのは本当にまれなことだったんだ。でも統計によると大豆はマネーゲームによって価格が暴騰しただけで、大豆は十分あることが分かったんだ。実際は1972年ソ連が大量の穀物を買占めたときの収穫量は不作のため落ち込んだというが、比較している1971年の収穫量は最高記録だったんだ。しかも収穫量は対前年比1%減で史上第2番目の収穫量だったんだ。つまり、にも関わらずソ連が穀物を買付けたことで市場は過激に反応したんだ。マネーゲームが市場を動かす社会というのは、ある社会事情が発生したときに過度に反応してなかなか元に戻らないものなんだ。つまり穀物価格は急騰したが、事情が分かったときもすぐには価格は元に戻らない。大豆価格は1ブッシェル2ドルだったのが、12ドルまで1973年に暴騰した。1977年でも大豆価格は9ドル以上の価格で維持され続けた。」

「ヨーロッパ、もしくは日本の大豆に対する需要が増えたとともに、大豆価格は2ドルから12ドルに跳ね上がり9ドルが大豆の平均的な価格になるというのは、非常に疑問が残る事実だよ。安価で安定した蛋白源としての大豆を宣伝し売り続けてきたアメリカの巧妙さが分かるね。食糧を外国に依存するということは問題があるんだね。」

「まったくそのとおりだとお父さんもそう思うよ。その穀物輸出のときに、カーギル、コンチネンタル、ルイ・ドレフュスといった巨大穀物勝者がまた登場してくる。アメリカ政府が動く前に大量の穀物をソ連に売却したんだ。1973年6月には米ソ農業協力協定が締結され、ソ連は巨大な穀物輸入国になったんだ。」

「東西冷戦をしている当事者国同士とは思えないね。」

「うん、でもその後アメリカは食糧を戦略物資として利用することになったんだ。食糧を輸入にたよるということは、工業製品と違い、生きていくための必須なものだけに与える影響が大きいことは創造できるよね。実際、アメリカはソ連のアフガニスタン侵攻の際に穀物の輸出停止を行うなど、食糧は戦略物資として実際に使われているんだ。」

「1972年の食糧危機は世界経済に大きな影響を与えたんだね。」

---

## COFFEE BREAK

ソ連とはソビエト社会主義共和国連邦といって、多民族が寄り集まってひとつの国を構成

していたんだ。ところが 1986 年チェルノブイリ原子力発電所で炉心溶融（メルトダウン）の後爆発し大事故が起きたんだ。経済的にも政治的にもソ連崩壊の原因を持っていたかもしれないけれど、ソ連の崩壊の根本的な理由は、この事故だとお父さんは思う。ここから民族問題や経済問題が湧き上がり、政治基盤を失ったソ連は崩壊しロシアなどの国々に分かれていった。原発には人間が責任の取れないほどの危険性がある。その後ロシアではロシアでは、資本主義の急速にひろがり、旧体制下の膨大な利権を財閥が手に入れ、貧富の差がひろがり、言論の自由がない社会体制がしかれるという事態になっているんだ。でも経済的には石油もさることながら、世界最大の天然ガス会社『ガズプロム』を中心に資源国としてヨーロッパ全土に天然ガスをパイプラインで送りヨーロッパのエネルギーを制覇しているんだ。

娘はしばらく考えた後でこう切り出した。

「でも、凶作になると飢饉や食糧危機が起きるということは、不作も食糧危機の理由になっているよね。きっかけじゃないような気がするんだけど。」

「悪循環の経済システムの話思い出そう。自国の食用ではない換金作物をひとつ作って、それが不作のときは現金収入も減るから食糧が買えず飢えていく。単一作物栽培の経済構造は非常に脆弱なんだ。でも飢饉は、作物の不作がきっかけで起こるのであって、原因自体ではないよね。それと食糧危機は穀物商社によって起こされる人災ではないかとお父さんは思っているんだ。」

「そういえば、カーギルやコンチネンタルが大量の穀物を輸出したって言っていたよね。」

「これからの部分は問題を整理しよう。①政府の農業政策と穀物価格、②穀物流通の仕組みと巨大穀物商社のビジネス方法、③穀物に群がるマネーと市場の 3 点から考えてみよう。」

### 農業政策と巨大穀物商社とマネー

「まず①番目の農業政策か……。きっと食糧危機が起きないように農家を支援して収穫量を上げる手助けをしたんでしょ。」

「いや、その逆なんだ。アメリカは『平和のための食糧法』（公報 480 号）を行ったんだ。これは戦後の日本でパン給食がアメリカによって無料で支給されたのと同じように、無料で小麦や大豆といった穀物を世界中に広めるための政策だったんだ。世界最大の穀物輸出国はその背後で、農民の生産性を抑え、収穫量が下がるように政策を行ったんだ。農業輸出国は過剰生産に対処するため耕作地を休耕を推奨したんだ。アメリカでは全アメリカ農地の 15%（6000 万エーカー）を休耕させるために農民に助成金を支払っていた。生産が必要な量の数値に近づくと、過剰生産だとして農民に農業生産をしないように仕向けたわけだ。」

「どうしてそんなことをするの？」

「需要と供給の話をしたよね。買いたい人と売りたい人との関係だ。売りたい人がたくさ

ん持っていると買いたい人は相対的に安くモノを買える。逆に、売りたい人が少ない場合は希少価値になり買いたい人は相対的に高いお金を出さないと買えない。つまり、穀物がたくさんあると、穀物の値段が安くなってしまふ。農産物価格の下落を防ぐためにアメリカ政府や穀物輸出国は農民に農業をできないようにしていたんだ。」

「食糧価格を高くしておくために、食糧を作らないようにしたということ？」

「そういうことになる。供給過剰で価格が下がるとヨーロッパでは大規模な買い付けをヨーロッパ諸国の政府が行い、大量の食糧が捨てられたんだ。食糧は工業製品と同じ『食べる商品』だから、飢えている人々に無料で分け与えるということは今の経済システムからはありえないんだ。アメリカ政府はソ連が穀物を買入れることを情報として持っていたにも関わらず、あえて食糧を増産しなかったんだ。」

「食糧危機が人為的なものであるという根拠がそこにあるんだね。生産者と消費者の需要と供給で穀物価格は決まっていなかった。政府が農業政策を行い、市場はマネーゲームによって翻弄され、巨大穀物商社が強力な情報網を駆使して儲ける構造があるわけなんだね。」

「でもこんなソ連の穀物の大量買付けが行われるようなことは昔の話で現在は大丈夫でしょ。」

「そうでもない。2004年からシカゴ穀物相場は高値圏にある。大国の中国とインドが食糧の大量輸入国になっているからね。しかも穀物の需要は食用の比率は減少している。肉食化の進展による飼料の需要だけでなく、近年は燃料として大量の穀物が使われているんだ。それが近年の食糧不足の要因を複雑化しているんだ。」

「大量の穀物が燃料として使われているの？」

「ガソリンの代わりに、トウモロコシやサトウキビと言った安い穀物を発酵・ろ過してアルコール（エタノール）を作り出し、ガソリンの代わりにバイオマスアルコール燃料として利用する開発が進んでいるんだ。米国ではトウモロコシから作るエタノールの生産が急増しているんだ。ヨーロッパではディーゼル車の比率が高いため、菜種油を原料としたバイオディーゼル油が開発され生産が進められているんだ。」

「じゃあ、②番目の穀物流通の仕組みと巨大穀物商社のビジネス方法ってどんなことなの？」

「当時の巨大穀物商社とは、カーギル、コンチネンタル・グレイン、ドレフュス、ブンゲ、クック・インダストリーズ、ADMの6社を意味する。前にも述べたようにソ連に強いコンチネンタルグレイン社はカーギルに吸収されているから注意が必要だね。これらの会社はただの穀物を販売する会社ではない。穀物問題を考える上で名前がよく出てくる、カーギルを例に考えてみよう。」

「えーと確か売上げ12兆円の、経常利益3300億円の巨大商社だったよね。」

「そう、カーギル社は同族会社、つまり株式の全部をカーギル家とマクミラン家の関係者が所有する個人企業であり、非上場企業としては世界最大なんだ。しかもアメリカ政府と



営は秘密のベールに包まれるのが現状だ。政治を動かす官僚たちと穀物メジャー重役室では人事交流が行われていた。農務次官らが穀物メジャーの重役に天下るレベルの話はざらだ。興味のある人はぜひ調べてみて欲しい。

「お父さん、じゃあ、食糧危機はどうしたら回避できるの？」

「スーザンジョージは著作「なぜ世界の半分は飢えるのか」のなかでこういっている。『備蓄不足によって生じる食糧危機に関して言えば、巨大穀物商社の食糧価格や備蓄の操作を阻止する唯一の方法は、政府の手で食糧を備蓄し、市場の動きに応じて売りに出したり、出荷を抑えたりする方法だ。備蓄を私企業の巨大商社に任せる方法はまったく矛盾である。穀物商社は農家から買い付けた穀物をできるだけ早くたくさんの利益を出すことが仕事である。彼らが穀物の備蓄量を調整し、市場価格の変動を抑え、安定供給を維持しようとすることを期待するのはまったく考え違いである。』

「流通が独占状態であるところが大いに問題があるんだね。」

「そうなんだ、そのおかげで穀物会社によって起こされる人災であるという論理もなりたつんだ。秘密裏に取引された膨大な穀物が膨大なマネーを呼び込む。そのマネーは実際の穀物取引を行わない、ゲームとして売買して利益を求めただけのマネーなんだ。実際に必要な途上国の人々とは無縁の人々のマネーが世界の穀物価格におおきな影響をもたらしているんだ。」

「それは穀物を実際に必要にしている人は安定的な値段を望むよね。」

「市場は乱高下することによって利益を生むシステムだからまったく正反対なシステムなんだ。食糧危機は先進国の経済システムがみずから作っているようなものといえるんだ。」

「世界の穀物備蓄量が減らし、アメリカ式農業や肉食文化がすすみ、バイオ燃料によって穀物が大量消費されているところに今の食糧危機の根本があり、それを国際市場というマネーゲームが問題をさらに深刻化させているというのが現状だ。」

「世界でもそれに気づき始めないと将来大変なことが起きそうだね。」

「世界各地で火はつき始めている。気楽なのは日本ぐらいだ。インドは栄養失調や食糧不足そして社会的不平等が蔓延している。そんな中で1998年8月9日、インドでは市民達が激怒し大規模なデモ行進が行われた。「カーギル＝モンサント社はインドから出て行け」がスローガンだったんだ。ベンガル地方で食糧不足が起こっている最中に、カーギルがベンガルから8万トンもの穀物を海外に輸出したために起こった事件だった。これは多国籍企業や穀物商社がインドの特権層の人々や大規模農場経営者と結び付き、貧しい小作人を安い賃金で働かせて利益を出すという経済モデルへの怒りの爆発だったんだ。」

「世界の市民が構造的な問題にすこしづつめざめてくると食糧危機もなくなってくるんだね。」

「食料は武器であり、国際交渉の有効な武器として利用されてきた。そのせいもあって、

穀物メジャーは政府とタイアップしてビジネスをしてきたともいえる。食糧は利潤の源泉であり、政治経済支配の道具として利用されているんだ。強国というのは、強固な農業を基盤として工業立国として成り立っていることを忘れてはいけない。そしてアメリカの財閥の人脈や企業の株主・経営者を追ってみると、農業を動かす人間がまた工業を動かしている。これは企業群や財閥の実際を知っている人からすれば常識でなんだ。そこに問題の奥深さがあるんだ。」

「自由化された市場は機能しないみたいに聞こえるね。」

「グローバリゼーションという自由化された市場経済は、途上国の生活環境や文化をを破壊することによって成長するそいっても過言じゃないんだ。巨大化された穀物メジャーやアグリビジネスが市場のコントロールを奪っているのが現状だ。自由化された市場が機能する場合は、需要の側と供給の側が同じ条件で、なおかつ流通や生産に競争原理が働く場合なんだ。独占された市場では市場原理は効率的に機能しないんだ。今日、世界経済の70%は巨大資本の支配下であり、世界の生産物の40%を扱っている。グローバリゼーションを推進し、利益を得ているのは、ルールを設定し、市場に影響を及ぼすのは、豊かな国の独占を行うわずかな企業なんだ。」

私は食糧危機にまつわる食糧の話を経済の立場からしてきた。次は人類の英知と人間としてどう生きるべきかを話すために、20世紀の革命について娘と話を続けた。